Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

リスニング・テスト作成の心得

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

今回はリスニング・テストの作り方を扱おうと思うが，みなさんはそもそもリスニング・テストを自身で作成しているだろうか。これまで私が見てきた定期試験問題の中には，かなりの比率で市販のテスト問題を切り貼りして作ったと思われるものがある。こうした問題は，往々にして教師の指導とかけ離れてしまっている。テストとは，教師が自身の指導目標に照らして自作するのが基本だろう。以下，そのための心得をまとめてみる。

1. スクリプトは（どう）書くか

リスニング・テストにおいては，まず生徒に何かを聞かせなければならない。このため，一般的に英語の教師はスクリプトを書いているだろう。しかしながら，本来話されるものを「書く」というのは思ったほど易しいことではない。とりわけ自然な会話を書くというのは，難しい。実際，自作の定期試験問題の中には，どのような人間同士であればこのような会話になるのかと首をかしげたくなるものもある。スクリプトを書き始める前に，どのような人物がどのような場面で何のために話しているのかを明確にしておくべきであろう。そうすることで，会話はより自然に展開していく。

リスニング・テストのスクリプトを見て，実際の会話ととりわけ異なると思われる点がある。実際の会話では，会話者はコミュニケーション・ブレークダウンが起こらないように最大限の努力を払うものだが，テストではなるべく聞き手に「いじわるに」会話が展開されるようになっていることだ。たとえば，実際の会話では，電話番号や住所などは何度も確認して正確を期す（場合によっては音の聞き間違いのないように“M as in Mary”のような確認さえある）が，テストとなると1度きりだったりする。

その他，自然会話では，well，er，you know，let me see，I mean などの filler があったり，繰り返しや言い直しがあったりする。また really や oh などの語も適宜入り，会話はいきいきとしている。教師としては，どれもなじみのものかもしれないが，意外とスクリプトを書く段になると忘れがちである。

しかし，考えてみれば，何もスクリプトを書かなければならないわけではない。何かのオーディオCD から素材をとってくることも可能であろうし，インターネット上の様々な音源を使うこともできるだろう。ただしこのような場合でも，指導目標との整合性や英語のレベルは確認すべきである。

音源の作成にあたり，ALT を利用する手もある。ALT の利用となると，音声を吹き込んでもらうことがすぐに頭に浮かぶが，スクリプトを書いてもらったり，自分で書いたものを見てもらったりすることもできる。より進んだ利用方法としては，ロール・プレイング・カードを使ってスクリプトなしで即興で演じてもらう方法もある。この方法だと，言いよどみや繰り返しが自然に出てきやすい。

2. 文脈の必要性

リスニング・テストでは，「これから流れる英語を聞いて，次の質問に答えなさい」というような問題がよくある。これはリスニング・テストとしてはありふれた問題だが，現実の世界では，このようにどこからともなく聞こえてくるようなリスニングはありえない。どのような場面で，誰が話しているかもわからない状況で行われる，自分と関係ない会話の中身を細大漏らさず聞き取らなければならないの

である。だとすると，このような「真空状態でのリスニング」は，現実世界にはないよけいな負荷を生徒にかけていることになる。ただでさえ文脈から切り離されているテストにおいては，場面や話者，聞く目的などについての情報を指示文に盛り込んでおくとよいだろう。

3. タスクはどうするか

リスニング･テストでは，何かを生徒に聞かせて，それを理解しているかを見るために何らかの作業をさせる。そうするのは，人の理解の結果は外からは直接観察できないからだ。

リスニング・テストというと Q&A 型の内容理解問題が思い浮かぶかもしれないが，英語の内容に合う絵を選んだり，逆に絵の内容に合う英文を選んだりする「絵とのマッチング・タスク」や，話しかけに対して適切な応答を選ぶ「応答問題」などもある。

しかしながら，これらのタスクは現実の生活の中で行われるわけではなく，いわばタスクのオーセンティシティーは低い。コミュニカティブ・テスティングの世界ではタスクのオーセンティシティーが強調されるが，とりわけリスニング･テストでは，オーセンティックなタスクの設定に向けていろいろと試みることができるだろう。オーセンティックなタスクを作るには，現実の生活でその英語を聞いたときにどのようなタスクを遂行するかをまず考えてみることだ。たとえば道案内の英語を聞くのであれば，現実の生活ではその指示に従って実際に歩くであろうし，天気予報を聞くのであれば，それに従って傘を持っていくかどうかを決めたり，その日の服装を決めたりするであろう。教室の中で紙の上で行うテストでは，このような行動をとらせるわけにはいかないので，次善の策として，道案内であれば地図の上に矢印で道順を書かせたり，目的の建物の位置を選ばせたり，天気予報であれば出かけるときの服装の絵を選ばせたりすることになる。

4.「理解のレベル」をどうするか

リスニング・テストを作るときには，どのような理解のレベルを問うのかを確認して，問題ができたら，その問題を解くときに生徒はどのような部分をどのように理解して解答していくかをシミュレーションしてみることをお薦めする。そうすることで，本来ねらっていた能力をそのテストが測っているかがある程度わかるからだ。

リスニングにおける理解といっても，様々なレベルがある。いわゆる文字通りの理解から，リーディングでいう「行間を読む」ような理解まであるし，特定の箇所だけを聞き取るという理解もあれば，話の全体の流れを理解するというものもあるだろう。たとえば電話番号や時刻の聞き取りは，特定の箇所を文字通り理解すればよいのに対して，短いストーリーの聞き取りというようなものであれば，1 語の聞き取りでは済まずにある程度全体的に理解しなければならない。

5. テストの弁別力

全体得点とテスト項目との関係を，そのテスト項目の弁別力という。つまり弁別力は，その項目が能力の弁別にどれだけ役立っているかを示している。もちろん弁別力は高ければ高いほどいいわけだが，ここではこれまでの私の経験に基づいて，どのような項目がリスニングのテスト項目として高い弁別力を持つ傾向にあるかを紹介しておく。

以下では，多肢選択式の内容理解問題における弁別力について考える。まず，弁別力が低くなってしまうのは，スクリプト中のキーワードがそのまま正解の選択肢となっている場合である。このような問題では，聞いた英語をそれほど深く理解していなくても正解できてしまうため，できる生徒とできない生徒の弁別はうまく行われない。これに対して，スクリプトに含まれている単語が誤答の選択肢になっており，正解の選択肢がスクリプトには含まれない単語で構成されているような場合には，弁別力は高くなる。もちろんこうした問題作りは，入門期のテスト作りにはあまりあてはまらないかもしれないが，学習段階が進んだところでは考慮に入れるとよいだろう。このほか，英語を理解できていなくても常識で答えられてしまうような問題や，問題同士が依存していて，片方ができるともう片方も自動的に正解できてしまうような問題などは，弁別力が高いとは言えない。